

いくつかの気象要素を用いて地表付近の大気安定度を分類する方法。風速と日射量（夜間は曇量）の値から不安定(A)から安定(F)までの6段階に分類する。これを用いて大気拡散式中の鉛直及び横方向の拡散幅を図により評価できる。

#### パフモデル

puff model。大気の拡散予測式の一つ。無風時に、ある1点で瞬間的に放出された煙が、時間とともに空間内に広がっていくときの煙塊（パフ）の内の濃度を表すもの。風が全く吹かないという仮定において解析的に導かれる。

#### バックグラウンド濃度

大気汚染の問題において、バックグラウンド濃度という言葉は頻繁に用いられるが、明確な適宜はない。一般的には、ある事業が行われている地域周辺の大気汚染物質濃度を考える場合、大気汚染物質濃度は、事業に起因するものとそれ以外のものとに分けられ、この事業に起因しないものをバックグラウンド濃度と呼ぶ。

大気汚染に関する評価をトータルの大気汚染濃度で行うためには、バックグラウンド濃度を予測し、対象事業に起因する予測濃度に加える必要がある。

予測の対象時期における大気汚染のバックグラウンド濃度としては、国あるいは地方公共団体等によって推定された排出量のデータを用い、将来の排出量の低減や交通量の推移等を見込んで推定した値を用いる。

#### ヒートアイランド現象

都市では高密度のエネルギーが消費され、また、地面の大部分がコンクリートやアスファルト等で覆われているため、水分の蒸発による気温の低下が妨げられ、郊外部に比べ気温が高くなっている。この現象は、等温線を描くと都市部を中心とした「島」のように見えるため、ヒートアイランド現象と呼ばれている。

#### 風洞実験

大気汚染の状態、特に大気汚染物質の拡散を、人工的に風洞内で風を起こし、地形、煙突、建物などの模型を作って行う実験。煙源からのばい煙の拡散状況は各種の拡散式で求められるが、複雑な地形の場合については風洞実験が不可欠である。

#### 風配図

風配図は、ある地点の風向の統計的性質を示すために用いられ、各風向別に出現頻度の百分率を線分の長さで示すものである。

#### 浮遊粒子状物質（SPM）

浮遊粉じんのうち粒径が $10\mu\text{m}$ （10マイクロメートル=1000万分の1m）以下の粒子をいう。 $10\mu$ 以下の粒子は気道、肺胞への沈着率が高くなる。

#### プルーム

plume。煙流。煙突から連続して排出される煙、又はその煙の形をplume又はsmoke plumeという。プルームとは羽毛又はタンポポなどの綿毛の意。プルームは排出される大気の状態を反映した形をとる。

#### プルームモデル

plume model。大気の拡散予測式の一つ。有風時に排出された煙が風によって風下に流されて行くときの煙流（プルーム）内での煙の濃度を表すもの。風下方向にだけ風が一様に吹くと仮定することにより導かれる。

#### 粉じん

大気中に浮遊する個体の総称。大気汚染防止法では粉じんは「物の破碎や選別などの機械的処理・堆積に伴い発生し又は飛散する物質」と定義され、燃焼、化学反応などで生じる「ばいじん」と区別される。粉じんは、さらに一般粉じんと特定粉じんに分けられる。特定粉じんとしてはアスベストのみが指定されている。

#### 面煙源

大気汚染の予測における汚染物質発生源の形態モデルの一つ。予測地域をある大きさの区域に分割し、一つの区域から一様に汚染物質が排出されると設定する。

#### 有効煙突高

煙突からの排出ガスは、運動量と浮力により上昇しながら風に流され、次第に水平方向に拡散する。煙突の実高に上昇による高度を加えたものが有効煙突高で、大気拡散の計算はこれを基礎に行う。

## 【騒音】

### A特性

周波数補正特性の一つで、騒音計には必ず備えることとなっている。A特性を用いて測定した音圧レベルが騒音レベルであり、単位はdBである。計量法の改正（平成5年11月）により音圧レベルの単位は『dB』となったが、A補正した音圧レベルが騒音レベルであることから騒音レベルの単位もdBとなった。従来、測定値などにAを付記していたが、補正していない音圧レベルと併記するなどの紛らわしい場合以外は付記しなくなった。

### dB（デシベル）

音響工学、振動規制等で用いられる単位で、ある一定値を基準にしたレベル量である。一定値を $A_0$ 、測定値をAとしたとき、次の式で表される。

$$dB = 10 \log \frac{A}{A_0}$$

### $L_{Aeq}$ （等価騒音レベル）

騒音レベルが時間とともに変化する場合、測定時間内でこれと等しい平均2乗音圧を与える連続定常音の騒音レベル。ある測定時間内で観測されたすべての測定値のパワー平均値と考えてよい。表記は $L_{Aeq}$ 。一般に騒音レベルは補正回路のA特性を通したものが用いられ、これを明記したいときは $L_{Aeq}$ と表記する。単位は、デシベル（dB）

この $L_{Aeq}$ は、一般的に主観的な騒音の大きさと対応がよく、環境騒音の比較的長い期間、たとえば数時間、1日、1箇月などの騒音を代表する値として用いられる。

### $L_{AN,T}$ （時間率騒音レベル）

騒音レベルがあるレベル以上の時間が実測時間のx [%]を占める場合、そのレベルをxパーセント時間率騒音レベルという。量記号は $L_x$ 、単位はデシベル（dB）である。道路交通騒音のように時間とともに不規則、かつ、大幅に変動する騒音を表すときに広く用いられており、50%時間率騒音レベル $L_{50}$ を中央値、5%時間率騒音レベル $L_5$ を90%レンジの上端値、95%時間率騒音レベル $L_{95}$ を90%レンジの下端値などといい、一般環境騒音の場合にその変動幅を90%レンジで表し、 $L_{50}$ （ $L_{95}$ 、 $L_5$ ）と表記する。

### $L_{d,eq}$ （時間帯補正等価騒音レベル）

騒音を評価する場所で、1日（0時～24時）の間の観測される騒音のうち、対象とする航空機騒音の単発騒音暴露レベルを環境基準に準じて補正した後にエネルギー加算し、観測時間（1日＝86,400秒）で平均してレベル表示した値

### $L_{50}$ 値（中央値）

騒音計の指示値が不規則に変動する場合の騒音レベル表現の一つで、 $L_{50}$ 値はそのレベルより高いレベルの時間と低いレベルの時間が半分ずつあることを示す。

### $L_{pA}$ （騒音レベル）

種々の周波数を含む音に対する大きさの感覚を比較的簡便に評価するための量。JISに規定される指示騒音計で測定して得られる値で、騒音の大きさを表す。一般には耳の感覚に合わせた周波数補正回路A特性の騒音計で測定した値をいう。単位はdB（A）を用いる。

### WECPNL（加重等価平均感覚騒音レベル）

Weighted Equivalent Continuous Perceived Noise Levelの略。

「航空機騒音に係る環境基準」の評価に用いられる単位で、「うるささ指数」とも呼ばれ、航空機騒音の特異性を考慮して、航空機の騒音レベルと時間帯別の飛行回数等から算出している。

### 暗騒音

ある特定の騒音に着目したとき、それ以外のすべての騒音。したがって、たとえ着目している騒音以外の、ある騒音の方が大きく支配的であってもそれは暗騒音（の一部）である。

### 音源の音響パワー、音響パワーレベル

音源が単位時間に放射する全音響エネルギー（音によって生じた力学的エネルギー）。音源を取り囲む閉曲面を単位時間当たり通過する音響エネルギーに相当する（量記号はp又は $p_a$ 、単位記号はW）。基準音響パワー（1pW）との比の常用対数の10倍を音響パワーレベルという。量記号は $L_w$ 又は $L_p$ 、単位はデシベル（dB）。

### 環境騒音

ある場所における、ある時刻の総合的な騒音。「総合騒音」ともいう。

### 基準時間帯

1つの等価騒音レベルの値を代表値として適用し得る時間帯。「騒音に係る環境基準」の場合では、昼間（6:00～22:00）と夜間（22:00～6:00）を基準時間帯としている。

### 環境施設帯